

薬師寺東塔の発掘調査(平城第622次)

薬師寺東塔の発掘調査は、薬師寺東塔保存修理工事にともない、2014年度(平城第536次調査)、と2015年度(平城第554次調査)に実施しています。今回の調査は、既調査において修理工事用の素屋根基礎の下に位置していたため調査ができなかった、北面と南面の各階段の北端・南端部を確認することを主な目的として実施しました。調査は既調査と同様に、奈良文化財研究所と奈良県立橿原考古学研究所とが合同でおこないました。

調査では、北面・南面階段とも地覆石(最下段の踏石)の据付痕跡、抜取痕跡を確認しました。これにより、北面・南面とも階段の出は約1.8m、階段幅は約3.0mと判明し、階段規模が確定しました。また、階段の周囲には犬走り、雨落溝が廻ることを確認しました。南面階段では、雨落溝の外周に接して、創建時の舗装である玉石およびその抜取穴を確認しました。また、基壇および階段の外周部では柱穴を複数基確認しました。これらは、創建以来の東塔修理にともなう足場穴とみられます。

今回の調査は小規模でしたが、東塔およびその周囲の構造を知る上で、貴重な知見が得られました。

(都城発掘調査部 前川 歩)



調査区(南面階段)全景(東から)

興福寺旧境内の調査(平城第625次)

2018年に落慶した興福寺中金堂は約300年ぶりに参拝者を迎えてます。今回、中金堂の北西に位置する鐘楼と、五重塔・東金堂の西面を隔てる回廊の整備に必要な情報を得るために発掘調査を実施することとなりました。興福寺の縁起等をまとめた『興福寺流記』によれば、鐘楼は養老4年(720)8月以前に造営に着手し、天平宝字年間(757~765)には完成しています。興福寺の諸建物は、奈良時代創建のうち幾度も罹災し、そのたびにおよそ旧規を保つて再建されたことが発掘調査でわかっていますが、鐘楼は、享保2年(1717)の焼失以後、再建されていません。いっぽう、五重塔は東金堂の造営着手に続いて光明皇后の発願によって建立され、天平2年(730)に完成したことが『興福寺流記』にみえます。現在の五重塔と東金堂は15世紀前半に再建され、国宝に指定されています。

奈文研では、興福寺の委託を受け2020年7月1日から発掘調査に着手しています。鐘楼では、遺存状態が良好な箇所が多く、基壇構造や建物構造の解明に重要な情報を得ることが期待できます。鐘楼は鎌倉期以降の絵図に袴腰を持つ姿として描かれていますが、この建築様式の成立について遺構から解明できる可能性があります。また、基壇裾西側を中心に焼土と炭が整地層を挟みながら幾重にも堆積しており、文献にみえる罹災と復興の履歴を示しているとみられます。五重塔・東金堂の西面を画する回廊については、回廊および門の基壇の東半が比較的良好に遺存していることから、門の規模、基壇構造の変化等について重要な知見が得られそうです。

今後の成果にご期待ください。

(都城発掘調査部 森先一貴)



鐘楼基壇裾の焼土堆積(北西から)